

後は持続感染系となり得る。増殖率に影響はない。②  
わずか1例ではあるがRV感染細胞にRT活性を認めた  
事は、細胞中のC型virusの存在とRVとのinteraction  
の可能性を示唆するものであるが、今後症例を重ねて充  
分検討すべき問題である。③以上の結果は今後RVの  
経胎盤感染および胎児の先天性風疹症候群を考えるうえ  
で意義のあるものと思われる。

質問 (東京大) 川名 尚  
Deciduaの細胞におけるRVの感染性はどうか。

回答 (金沢医大) 杉浦 幸一  
2例程行いましたが、Chorionと同様の傾向を認めま  
した。

## 296. サイトメガロウイルス(CMV)のトランスフ ォーメーション能に関する研究

(石川県立中央病院)

矢吹 朗彦, 朝本 明弘

目的: ヘルペスウイルス群の特長は、生体内で潜伏持  
続感染を成立させることと、単純ヘルペスウイルスⅡ型  
と子宮頸癌、EBウイルスとバーキットリンパ腫や上咽  
頭癌などの悪性腫瘍との関係が示唆される点にある。第  
3のヘルペスウイルスとも呼ばれるCMVも、宿主細胞  
DNA合成の促進、内在性C粒子の誘導との関係などか  
ら、その造腫瘍性が注目されている。私共は、この問題  
をin vitroに於けるCMVのtransformation能から追  
求した。

方法: CMV持続感染細胞(Ch/CMV)を成立させ、  
無処置培養、培養液中にprogesterone (1000, 100, 10  
ng/ml), E<sub>2</sub> (1,000, 100, 10ng/ml), hCG (10, 1, 0.1  
IU/ml) 及腫瘍プロモーターTPA (1, 0.5, 0.25ng/ml)  
の添加、コクサッキーB5ウイルスの重複感染などを行  
ない、Ch/CMVでのtransformationの成立の可能性を検  
討した。

成績: 初代絨毛由来線維芽細胞にhigh moiでCMV  
井上株を接種し持続感染細胞を得た。このCh/CMVは、  
細胞集団としての持続感染系の形を取り、10<sup>2</sup>~10<sup>4</sup>PFU/  
mlのCMVを放出しつつ、細胞変性効果(CPE)と増  
殖とを周期的に繰り返しつつ、同一培養器で約6ヵ月継  
続培養され、cell crisisにより消滅した。passageされた  
場合も、CPEがpassageごとに増強し、11代でcytolysis  
に陥ちいつた。種々の添加物及びウイルスの重複感染処  
置の結果に於ても同様であつた。即ち、contact inhibi-  
tionの消失、細胞株の確立、コロニー形成能の確保等の  
transformation成立の現像は観察されなかつた。

考察: CMVによるヒト細胞のin vitro transformation  
の報告は、RappらのHCMV-Mj-HEL (1976)が唯一  
であるが、最近この細胞からウシ伝染性鼻腔気管炎ウイ  
ルスが分離されたことや、Rappら以外にCMVによる  
transformationは報告されていない点などから、CMV  
のトランスフォーメーション能については、さらに検討  
が必要であろう。

質問 (東京大) 川名 尚  
CMVの子宮頸癌との関連性はどうか。

回答 (石川県立中央病院) 矢吹 朗彦  
マレック病ウイルス(トリの悪性リンパ腺を造るヘル  
ペスウイルス群)は、in vitroでまだtransformationは  
証明されていない。このことより、私共の線維芽細胞を  
つかつた実験のみではCMVのtransformation能を完全  
に否定することは出来ない。しかし、ヒトの95%以上に  
CMV持続感染が成立している事は、もし、CMVがヒ  
ト癌と関連があるとしても、何かもう1つのfactorが  
必要であると考え。がんに於けるCMVの存在は、宿  
主細胞内に組み込まれたウイルス遺伝子が、細胞の変化  
(癌化)に伴ない、その増殖に同調出来なくなつた結果  
単に再活性化されたものであると云う考えかたも出来る  
のではなからうか?

質問 (金沢医大) 桑原 惣隆

妊娠後期の妊婦子宮頸管より約28% CMVが分離され  
ると云う報告があるが、分娩時のとりあつかいについて  
どうお考えか。

回答 (石川県立中央病院) 矢吹 朗彦

96%以上の妊婦がCMV潜伏感染状態にあり、抗体を  
保有しているため胎児の抗体移行が考えられ、初感染で  
ないかぎり産道感染の心配はないと考える。

## 297. 産婦人科領域における無芽胞嫌気性菌感染症に 関する研究、第1報: 無芽胞嫌気性菌の分離について

(岐阜・多治見市民病院)

二宮 敬宇, 長谷川幸生

1) 研究目的: 無芽胞嫌気性菌(嫌気性菌)の化学療  
法剤に対する感受性はE. coli, S. aureusなどの通性嫌  
気性菌(好気性菌)とは大きく異なっている。又、この嫌  
気性菌が婦人外性器の優位常在菌叢を構成している。  
この為、本領域では嫌気性菌の動態の把握が感染症にお  
いて重要な意味をもつ。近年、嫌気性菌分離に関する  
Technologyには飛躍的發展がみられ、Mooreらは産婦  
人科などの臨床材料から80%以上に嫌気性菌が分離さ  
れ、その感染症の重要性を報告している。演者らはこの